

(2) 決してあきらめないで

2011年は3月の東日本大震災を境に消費流通での環境は大きく変わりました。そして、その影響は今だに尾を引いて食に関わる分野では、企業や業態によつての濃淡がみられるものの、業績の厳しさが浮かび上がった年となったようです。震災と原子力発電所事故の直後には、消費者の買いため騒ぎなどでコメや食品が一時はスーパーの店頭から姿を消したり、価格の高騰など不安定市況がみられながら通常ペースに戻るまでに時間を要したこともありました。特に放射能汚染が云々されたコメと食肉は安全宣言や全頭検査の実施など努力の甲斐もなく、風評被害もあって値動きは安値安定したままの状況が長かったといえるでしょう。

明けて2012年1月5日の卸売市場初セリには事務所職員も大勢で視察してきましたが、例年通りに出荷された県産サクランボが昨年を超える12万円と縁起を担いでの卸祝儀相場が出ました。築地では大間産の黒マグロが史上最高値を更新して1kg21万円と活況を呈したと報じられていました。落ち込んだ昨年の流れを断ち切りたい願いが高値市況を呼び込んでのスタート・ダッシュを目論んだともいえるでしょう。デパートなどでの初売りでも趣向をこらした福袋などを中心に行列が出来るなど去年の縮み志向からの脱却を予感させられる需要面での回復もみられています。

しかし、南米各地での早ばつや大洪水など天候異常のニュースでは、ペルー沖のラニーニャ現象が影響しているといっています。とすれば、日本の冬は寒波の年ともなり、農作物での冬春物の生育が懸念されないではありません。原油相場の上昇が云々されるなかで、ハウス栽培のコストが上がり、果菜類を中心に品薄傾向でも続けば、またマスコミを賑わす材料となるかもしれませんね。緩みがかつた消費者の財布の紐を再び締めてしまうのか否かは、天候次第といってしまうて良いもののでしょうか。流通、小売りの側では震災と原発事故に負けない一歩を踏み出しました。作る側でも決してあきらめない意思をもって共に食を大切に新たな商機を求めていきたいものです。

(鈴木 重雄 筆)